

日本民族性と佛教の発展（三）

鈴木 大拙

第二講

いま山田さんとお話をして、大分覚えてきたのですが、日本人の順応性といいますが、外国のものと接触することによって、日本のわれわれの祖先がもっておった力が出て来たというようなことがあったのではないかと思うのですが。

たとえば、平安朝時代というものは、シナへ遣唐使というものがもう行かなくなった。そうして、日本だけにかたまった時代でございます。平安朝の文化というものは、なるほどあれがなかったならば、われわれも今日のようなことはなかったろうけれども、しかし、平安朝の文化というものは、極めてか弱いものだと思うのですが。何だか女々しい女流文化です。平仮名があのととき始まったというようなことです。それから婦人の文学というものが非常に発展してきております。まあ私など、その方のことはあまり知りませんけれども、紫式部の源氏物語というような、

ああいう文学的作品があゝの頃に婦人によってできたというような話を聞いておるのですが。それから、平仮名というものは女文学ということによって知られておったわけでしょう。そうしてあゝの頃の日記を読むというと、女がすることを男もやってみた、というような塩梅に、日記なんというものも女の真似です。藤原時代にできた芸術品にしても、すべて優美な悠長な、如何にも女性的なものが、そこに現れてみえるのです。これは、日本の自然というものが女性的であるから、そういうふうになるのかも知れぬと思うのですが。

富士山のお話を昨日も致しましたが、富士山は如何にも優美というか、麗しいのであるが、それは男性的なものではないです。如何にも清らかなすがすがしい心持はするが、どうも雄大な、人を圧するというようなものが、富士山には見えないような気がするです。たとえば、

田子の浦ゆうちいでてみればましろにぞ富士のたかねに雪はふりつつ

という歌にしても、これは有名な歌ですが、あれを読んでも如何にも優美な清らかなところが見えるです。けれども、男性的な威力で圧するというようなものが見えていないのです。その点で、まあまあ、あれが日本人の性格を陶冶したというならば、一面においては甚だよろしいのだが、また一面においては少しく女々しいことも少なくもないようでありまして、情的な方面へ傾きすぎるというようなことがないかと思われるのです。

私は文学の方は全く知らぬと云つてよいのでありますけれども、万葉時代に、太陽が海から上ってくる、その朝日の朗らかさは歌つてあるように思われますけれども、朝日の堂々としたところ、それを歌つた歌があるかどうか。あるかも知れぬが、私はまだ知らないのです。朗らかな点は云われておるのですが、しかしながら、どうもそこに男性的な壮快な雄大な気分というものが出ていないように思うのです。それは、いま申すように富士山もそうでありませうけれども、日本は氣象学的に湿気が多いというようなことで、ものがはっきり見えぬ、赤裸々に出て来ないといううなことがあるのかも知れぬのです。すなわち、ものを暈すことがあるかも知れぬのです。

これは、インドやシナでは随分と違っておるのです。インドなどは、ことに熱帯で色彩がきらびやかであるから、われわれ日本人から見るといふと、どうもあんなゴテゴテしたいうか、しつこい色はどうかと思うようなものが、赤道直下ではそうキラキラしないです。ああいうものを日本へもってきたらとてもわれわれを刺戟しすぎるだろうと思うくらいの色合いがあるのですが。絵の方は、他人の話を聞いておるだけだが、シナの絵を見ても、字を見ても、そこに一つの力が現われて見える。日本のような繊細なところがないように感ぜられる。日本の場合は、どういうものだか知らぬが、とにかく日本人だけで一つの島国にかたまっておるといふと、そういう気分になるです。そういうふうになるのだが、それがちょっと他の国の文化に接するか、他の民族に接するといふと、余程変わった気分が入ってくるのです。

たとえば、聖武天皇の時に奈良に大佛ができた。ああいう大きな建物ができた。今日の建物はあれで三分のいくらいだということであります。大佛もわずかに蓮弁が遺ったというふうなわけで、もとのものではないそうでありますが、もとのものが遺っておったならば、今日あるようなものよりも、もっと我々の魂へ入るようなものがありはしなかったかと思うのですが。聖武天皇が大佛を鑄造しようとか、東大寺を建築しようとかいふようなお志をお立てになったのは、やはり、佛教の影響、ことに華嚴の影響であつたと思うのです。今日から見ても、まあ、あの頃の日本というものは、そう大したものじゃなし、三国の一といったところが、ただ観念的にそう考えていたのだろうと思います。けれども、その考えには如何にも天地を引き包むというような心持がございます。いま正倉院に遺っておるところの色々な貴重な御物というものも、単に日本でできたというだけでなくして、その頃の東亜とか天竺とかいふような、すべての世界の文化をひとまとめにして、天竺そのものから直ちに來たかどうかはわからぬけれども、まあ、ずっと中央アジアからシナを通して來たといふようなもの、そういうすべての世界の文化をひとまとめにして、そうして、そこに日本的なものを加えておいたのです。そういうことがあるのは、日本が小さくかたまら

ないで、ほかへのびようとして、その度にほかのものと接触して、ほかのものを取り入れようとしておったということだと思われるのですナ。

それから、大佛の開眼供養と申しますか、お祭のあったときにも、音楽をやったそうですが、その音楽をやるのも、これはインドの人であったとか、婆羅門僧正であったとかいうような話もあるですナ。それで、その頃にインドの人が日本へ来たりするということは、直接に來たかどうかは知りませぬけれども、とにかく容易ならぬことだと思うですナ。今日から見れば、まあ、世界全体を何でもないように、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりするのですけれども、いまから千年も前にああいことが行われておったのです。その頃の日本の文化というのは、そう大して力み返えるくらいのものがあったとは考えられないのですナ。考えられないけれども、ほかの文化を取り入れて、それに順応して、そうして自分独自のものをそこに打ち開いてゆこうとするには、実に驚嘆すべき力をもっておらぬということではないですナ。

よく、外国の人も云いまするし、日本人も云うようだが、日本人はものを創造する力をもっておる民族ではない。これは、他の文化を伝持するというか、古い文化を伝えて保存するというか、そういう力をもった民族だということです。まあ、ドイツのヒットラーのマイン・カンフに何かそういうようなことを書いてありますナ。アーリアンとか、チュートンとか、ラテン人種とかいうものは、創造的な力をもっておる。東洋の日本は、いわゆる文化の保存家というか、まあ他人から伝えて來たものを一所懸命に大事にしておく国民だ、というように書いておるです。けれども、それは単に真似をするというようなことじゃないです。外国の文化というものを消化するということは、これはこちらに何かものがないとできないわけなんです。いろんなものをもって來るだけならば、分裂的に、機械的になってしまつて、独自のものは何もそこに出て來ないですナ。他の文化をもつて來るにしても、もつて來て自分のものにするだけの力がなければ、やはりそこに創造性というものを認めるわけにはいけません。やはり日本人が何か創造的なもの

をもっていなくては、それはできぬことだったと思うのです。

そういう点から見て、近代の話を少しするというと、西洋の文化、欧米の文化が今日盛んに入ってきて来ておるですナ。欧米の文化というものは、東洋に発達したところの文化とは性質の違うものなんです。科学的なものである。近代はことに科学的な分別的な知性的な色の強い、日本の本来のものから見るというと違った性格のものなんです。そういうものが入って来て、盛んに取り入れられておるのです。そうして、それと今まであったものとの衝突というようなことがいたるところに見られるのです。文化のいろんな方面にわたって、異質な科学的な計画的な知性的な組織的な文化というものが、今までずっとわれわれの祖先を支配し、われわれもそれに支配されてきたその文化の性格と衝突するのです。その衝突はいたるところで見せつけられるですナ。今日、こうして戦さをしておる最中では、なおそれが眼につくのである。甚だしく衝突しておるですナ。その矛盾がわれわれの今日の生活だろうと思うのです。これがこれからどうなるかということは、われわれ、ことにお若い方々の責任であると思います。

そういう点において、単にわれわれの祖先が伝えたところの文化を保存するということでなくして、この異質の文化というものが入って来たのを、これはどうしても排斥することができないものなのだが、これは余程ものを考えて取り入れなければならぬですナ。

今日、飛行機がなく軍艦がなかったならば、いくら大和魂をやかましく云っても駄目なことは云うまでもないことなんです。もちろん、精神的迫力というものがなかったなら、そういう飛行機も軍艦も操縦するというわけにはいかぬだろう。いかぬだろうが、大和魂の迫力があれば梅干と握り飯で戦さができるとか、もう一つ云えば竹槍で戦さができるとかいうようなことは、もはや問題ではなかうと思うですナ。

一方では、これは敵国の文化だとか何とかやかましく云いながら、そう云っておる人があの西洋の高い帽子をかぶっておるですナ。あれほど醜いものはない。いまはみな国民服を着ることになっておるのかどうか知らぬけれども、

やはり時々あの高い帽子をかぶったりするお方がございます。それから、シャンペンというものがあります。あれも、よそから来たお客さんなどにやはり御馳走しておるのだろうと思うのだが、あれが大和魂の發揮であるのか、西洋魂の真似か、どちらかわからないのです。そういうところを考えないで、メートル法が悪いとか、左書きが悪いとか、何のことだかわかりはしない。

まあ、話が脱線したようだが、外国の文化と接するときには、われわれのもっておるものが發揮すると私は思うのですが。

天平文化にしても、戦国時代にしても、南方と接してきておるのです。あの頃には、ポルトガルとか、スペインとかいうような国が非常に力をもっておった国です。そういう方面の文化に接して、今までのように単に鎧や兜で固めて刀で斬り合ったのではとても間に合わぬので、やはり種ヶ島でドンとやらんなんということになるのです。ああいうところから段々に科学的文化が入って来はじめた。そのときに単に真似をしたというようなことじゃないです。真似をするという点ならば、いまの南洋の方面などは日本よりもずっと先に外国と接触しておる。接触しておるけれども日本のような塩梅にはいかないで、如何にも奴隸的な、ただ模倣的なことにしかなくていいです。そういうところから見ると、日本の文化は他人が拵えてくれた文化を単に背負って、蔵に収め、そうして貯え、国宝的に扱ってゆくだけのものであると、そういうことは云われぬと思うのです。

そこに、やはり何か、日本民族としての非常な使命があるのじゃないかと思うのですが。東洋の文化、とくにシナが眠り、インドが眠っておるときに、日本が先に立つて今日のような活動ができるということは、そこにやはり何か本来もっておるところの不思議な力が相当あるだろうと思うのですが。それをどうやって保存してゆきたいというのがまあ私の希望です。

そういうところから、佛教というものも、今日の文化の展開に沿って、いままでのようなことをやっていったので

はいかんのではないか。そういうことは、あとから申し上げられるか、申し上げられぬかわからぬが、そういうことも思っておるのです*

それはそういうことにしておいて、平安文化というか、公卿文化というものが、行き詰って、そうして武家文化、平民文化というものになったというのが鎌倉時代です。鎌倉時代は日本の民族が本当に大地と一つになって、この大きな地面から新たなものを生み出すということになってきたわけなんです。まあ他の方面のことは今日申し上げるわけではありませんから、佛教のことを申してみたいと思います。

鎌倉時代に初めて佛教というものが日本化した、こういってよからう。すなわち他国から輸入してきた外来のものでなくして、これがわれわれの心から出たもの、日本という国土に生れてきたものと見てよい。見てよいというくらいのもんじゃない。見てよいものとなっておる。このように思いたいです。それで、佛教はインドから来たとか、シナから朝鮮を通して来たとかいうような、そういう佛法でなくて、つまり南都北嶺というところに、仮りに移植されたところの思想でなくして、本当にこの国土に生れたものなのです。

京都の烏丸あたりにブラタナスという木が植えてあるが、あれはもとは高山植物だったということを聞いておるのですが、あれがこういう平地へもって来られて、そうしてそこに馴れて、そのものになるには、やはり何年もかかるということをおるのです。それから高野山からもって来る石南花にしても、まあここらあたりはまだよろしいけれども、暖いところへ行くというと駄目になってしまうのです。しかし、あれもいくらか年代をかけて世話をしてくくという、その気候に相応したものになるのです。そうすると、それはそのものだと言ってもよいことになるのです。

佛教もそういうわけで、天平・推古の時代から鎌倉時代にいたるまでの何百年というものは、まだ外国的色彩をもっておったのです。けれども鎌倉になって初めてそれが土着のものになった。日本のものになってきた。それで、佛

教は外国からきたもので、これは外国の思想であつて日本のものじゃないと、こんなことをよく云つておるけれども、ああいうことを云う人は、ものが生長するということを知らぬ人ですナ。例えば、一つの小さなドングリであつたらば、そのドングリはいつまでもドングリでなければならぬと云うですナ。そこから芽が出て大きな榎の木になるとか、櫟になるとかいうことを認めない。もとのドングリでなければならぬと云つて一所懸命に色んな科学的方法を講じて、ドングリをドングリ以上に達せしめないように努めておる人がどこにでもあるものですナ。それは仕様がございませんナ。仕様ががないのだが、そういう人はそういう人として、仕様ががないからやはりドングリのように、どこか隅の方に転がっておつてよろしかろうと思ふのです。そうでない人は、その芽を生やすように、まあ肥をかけて、その肥が下肥であつてもかまわぬのだが、また化学的肥料であつてもよし、または人造肥料でもよし、また合成肥料でもよし、何でもよろしい、あらゆるものをもつてきて、そうして、暑いときに蔭になつて、世界の人を休ませるような、そういう堂々とした緑蔭の太木というものに仕立て上げておきたいと思ふ。また役に立つ場合には、そいつを伐つてもよいじゃないですか。近頃のように木の船でも拵えるというようなことにしてもよろしかろうと思ふのです。

それで、やはりインドから来た佛教が鎌倉時代にそういうことになり得たと私は見たいのですナ。そのなり得たものは何かというと、真宗と禪宗と、それから日蓮宗ですナ。真宗といううちに、浄土宗も入れて、何なら浄土宗と呼んでおいてもよいわけですが、ことに真宗の方が日本固有のものになつていったと、こう云いたいのです。禪宗の方は、日本人の宗教的生活の中へ入つていったことは入つていったが、それよりもむしろ芸術の方面、美術の方面、芸術的の日常生活の方へ入つていったと、こういうふうに見たらどうか知らんと思ふのですがネ。日蓮宗の方は私はあまり知りませぬが、しかし御題目というものになつたということとは、六字の名号ということとは大分違う点はありませんけれども、そこに或る意味の日本人の性格を見てもよろしかろうじゃないかと思つておるのですがネ。

とにかく、最も日本人の宗教的性格の生々したところが真宗においてうかがわれる。これはどういふ点でそうかと

いうと、それは、先に申しました日本人の純情的な性格と一致するのだと思うのです。純情ということとは、喧嘩して怒るとか、腹をたててそこの器物をこわしてまわるとかいうようなことでなくて、それもまあ一つの情であるが、そこにはまだまだ純なものが入っていない。すこぶる我執我慢の強いもので、「わしが……」とか、「われが……」とか云って力むものが入っているのです。いわゆる煩惱というものが、本当にまた精練せられてないものが入っているのです。けれどもそれが段々に純化してゆくという、情のその純化したところは無辺の愛であると私は思うのです。大悲と云ってよからう。大悲というものは無縁の慈悲であって、こういうことをしたから救ってやろうとか、ああいうことをしたから救ってやらぬとかいう差別をつけるところのものではないのです。悪いことをしようが、悪いことをしなからうが、善いことをしようが、しなからうが、誰でもみな一様に救ってしまうのです。これは。まあ、悪人正機と云ってわざわざ悪人を選んで救うと云うたらもう間違いだらうが、そうではなくして、悪であろうが善であろうが、そういうことに頓着なしに、何でも救い上げるところまで情というものが純化せられて、そうして大悲というものになる。それが本願というものになる。わしはそうだと思います。これが真宗において最も鮮やかに見られておるのです。

それで、日本の今までの宗教的歴史を見ても、親鸞聖人のように飛躍をした人はなかったのじゃないかと思われるのです。宗教的にどういう点でそういうことをいうかという、廻向ということですね。ただ自力的に廻向ということとを考えておったものが、一転して阿弥陀の方からの廻向ということを経験せられたところなんです。それは、余程の天才といえますか、そういうものでなければできぬことだと私は思うのです。一方向に向うへ向うへと阿弥陀の方へ向っていたものが、今度はひっくり返って、そうして阿弥陀の方からこちらへ向うという、そういうことはなかなかできぬものだと思うのです。これができたということは、まあ、宗教的天才というか、そんなような名をつけては甚だ不都合であるけれども、仮りにいうとそういうものがあつたと思われるのです。

浄土教というものはシナにずっと発達してきたもので、日本の法然上人にしても親鸞聖人にしても、みなその流れのお方ということになりますナ。まあ、親鸞聖人は法然上人を継がれたのであるが、もちろん法然上人の云われる通りを云われたと見なければならぬのですナ。そうして、親鸞聖人から見れば、法然上人の真意は親鸞聖人に伝わっておるのだと、こういうことになるですナ。そこでシナの浄土宗を見ると、浄土の七祖というのか、六祖というのか、そういうものは、弥陀の方へこっちから廻向するというか、功德を廻向して阿耨多羅三藐三菩提を成就するということをやろうと、こうなっておるが、成就せられた阿耨多羅三藐三菩提が阿弥陀の方からこちらへ来るというような、全く逆なやり方はシナではしていませんナ。シナでは宋時代に、元時代という方がよいですか。宋の末から元・明の時代に、念仏というものが禪と混合しておる。唐の時代からもう既に浄土と禪というものは近寄っておるのでありますけれども、元・明の時代にはもっとそれが顕わになってきて、そうしてその頃の禪というものはまあ浄禪といってよいくらいになっておるのです。浄土教というものは、そういう方へ展開していったのでありますけれども、法然上人の浄土教が親鸞聖人の浄土真宗になったというようなことは、日本でできたことなんです。同じような思想的の先輩がシナでも出そうなものだが、シナではそれができないで日本に出た。そうしてそれが鎌倉時代に出たということには、宗教的に見て非常に意味があるじゃないかと思うのですがネ。

親鸞聖人の思想に世界的なものが含まれておるということも云わなければならぬが、それと同時に、親鸞聖人を生み出した日本の民族の宗教的体験の中には、今日の世界を救うところの思想があるのではないか、そこから出て来はしないか、それを出すのが今日の日本人、日本民族の使命でないか知らんと思うのですがネ。経済的に、政治的に、世界には色んなこともありましようけれども、宗教者としては、またそれ自身の職域というか、はたらき場所の使命というものがあると、こう私は思うのですネ。それは親鸞聖人の上に展開したところの真宗のはたらき場所ですナ。弥陀からの廻向です。この廻向は、何らの条件もなしに、何でもかんでも善惡を問わず、悪人でも善人でも何でも構

わないで、悉く引き入れて浄土往生をさせようという、そういう展開です。私は、これが非常な発見であるし、いま転進ということをよく聞かされるが、転進であると思うです。また転向であると思うです。転向というと、アカからの転向というようになるようだが、それなら転回と云ってよからうと思うです。非常な宗教意識の転回であると思うのです。これは乾坤を翻転するといってもよい、天地をひっくり返すものであると思うのですが。それがシナにできそうであって、シナにできなかったのです。

日本はシナの真似をしておるとか、西洋の真似をしておるとか、よくそういうことを聞くのだが、真似だけしておる国ならば、そういうことは一向にできないのである。これは、単に機械のどこか一部を工夫したとか、或いは飛行機のどこかに細工を加えたとか、そういうことではないです。宗教的に見るといって、東の方へ東の方へと進んだものが、今度は逆に、東の方から西の方へ向きが変ったということになる。これは単なる小細工じゃないです。単なる一部分の改良とか改善とかいうことではないのです。これはもう非常なひっくり返りだと思うのです。

だが、そういうことになってしまえば、何でもないものです。物事はでき上ってみると何だということになる。初めてできたことでも、しばらく使い馴れると、千年も二千年も前から誰も彼も、われわれの先祖が使っておったような気がする。けれども初めてそういうことを考え出すということはなかなかできないことなんです。私はそこが余程偉いと思う。個人として親鸞聖人が偉いというよりも、親鸞聖人を生んだ民族というものが、宗教的に余程偉いといいたいと思うのですが。

キリスト教の方は、これはユダヤの方から出て、いわゆるセミティック種族の考え出したものであるです。今日ではユダヤ思想は何だかんだと云われておるけれども、このユダヤ思想というものの中へキリスト教というものを入れて見ることができるです。今日のキリスト教は単なるユダヤ思想というよりも、グreek思想もローマ思想も入っておるだろうと思う。けれども、それでもやはり根幹はユダヤ的、ヘブライ的なものであると思います。そうして

それがやはり、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、みんなを包んでおるわけなんだから、経済の方面のユダヤ思想というようなものは、色々と云われておるのでありましようけれども、宗教的な方面から云えば、ユダヤ思想が世界を風靡しておるですナ。ところがこのユダヤ思想というものは、二元的になっておるのです。神と我というものを置いて、そうして、こういうことを人間がやるというと、神がそれに対して何かやってくれる。こういうように、必ずしも交換条件ということではないけれども、どうもそこに神と我というものを二つ置いておる。そうして我は神へはどうしてもゆけないので、神の方から御心のままにということになる。神の御心のままに出て来るものがないというと、われわれは助からぬということになっておるのです。

ところが、佛教の方ではそれと違っておる。弥陀の誓というものは、不断常住なるものであって、いつも出ておるものなんですからナ。それは或る意味で云えば、神の御心というような、何かそこに人為的なものがあるようなものがあるが、そうではなくして、弥陀はむしろ機械といつてもよいような工合いに、太陽がいつでも光を出しておるといふような塩梅に見てもよいくらいに、弥陀の恵みの力とか、慈悲の力というものは、常住不斷に出ておるのですナ。キリスト教の神が自分勝手に気の向くときに出して来る恵みというものは、大分趣きの違うたものが東洋の宗教思想の中にあると思うのですナ。

そこで、ちょっと見るというと、浄土真宗とキリスト教というものはよく似たようなところもあるけれども、その点に余程の違いがあると私は思うのです。キリスト教は道徳的に佛教よりも強いということが云われ得ると思う。それはどうしてかということ、自分に責任というものをもつのです。信者の方に責任というものをもって来るのです。自分ほこれだけ努めて、これだけ清くならぬと、神の御心になうわけにはゆかぬという、そういう個人的な道徳的責任というものをもって来るから、キリスト教では、道徳生活と宗教生活とが非常に関係深くできておるのですナ。

ところが佛教の方では、いま申すように、善悪というものを超越したところから出て来るはたらきであって、悪人

でも善人でも構わぬというようなことになってくる。そうやってくると、そこには道徳的責任感というものがあるが、薄らいでくるような傾きがあるです。そういう不道徳性が佛教の考え方から必ず出て来るということではないが、出て来るような傾きというか、癖というか、そういうものがないことはない。こういうことなんです。何もそこに論理的必然性があるとか何とかいうようなことではなくして、人間というものを通して出て来ることによって、人間のもっとおる一つの癖として、非道徳的な傾きをもたぬことではないと、こう云いたいのです。キリスト教の人が佛教をやたらに攻撃してくるときに、往々にしてこういう点を指摘することがあります。佛教徒の方にもそういうことは困ったことだという考え方があるので、その点も用心しておかんといかんと思うのだが、まあとにかく、阿弥陀の誓というものは、阿弥陀の方では善も悪もないわけで、こっちの方で悪人と感ずるのです。こちらの方では悪人と感ずるのだが、その感じというものが強くなればなる程、弥陀の方の恵みの力が強く感じられてくるわけです。弥陀の方の力というものは、強いも弱いも薄いも濃いも何もないのであるが、それを感じ得る方が見て、強くなり弱くなり、また如何にもありがたくなってくる、こういうように私は思うておるのですが。

とにかく、いままで道徳というように感じ、つまり分別の世界において、そうしてその分別の世界を出ることのできなかったものが、一躍して横超の世界に入ったということなんです、それは。この横超という言葉がまあ非常な意味をもつことだと私は思うておるのです。すなわち、横超という世界に行かんという弥陀の恵みというものを感じることができないのだと思います。この横超ということが、どういう意味になるかということなんですが、われわれはいつも分別ということに捉われておるのです。凡佛不二と云っても、何と云ってみても、みな一種の分別であり、計らいであるのです。計らいの世界というものは、きっと二つに分れるのです。分れるから計らいということが云われるわけです。分れなかったら計らいということは云われない。分れるというと、これか、あれか、ということになるのです。どちらかを取らんなんということになり、どちらかを捨てんなんということになるのです。

そこに矛盾というものが考えられて来るのです。ところが横超ということになりますと、一たび分別の世界を超えたということは、分別を捨てるということではないのです。善もあれば悪もある。美もあれば醜もある。嘘もあれば本当もある。それをそのままにして、それでない世界、美が美でなく、悪が悪でない世界がそこに展開する。これを横超と云いたいと思うのです。その横超の世界に入ってみて初めて弥陀から廻向せられるということがわかる。こう思うのです。

それで、いま申すような分別の世界にある限りは、こちらからあちらへ向う。こちらで何か善いことをするか、功德を積むか、そういうことによってあちらへ向おうとするのです。ところが、横超の世界、往還の廻向に入ったところの世界では、悪いことも善いことも、そういうものを捨てるということではない。善いことも悪いこともそこにあるながら、それを善いことと悪いことと、そういうところから見るのでなくして、善いこともある悪いこともある、それをそのままにした、そういうところから見る世界が開けてくるということです。それが大悲の世界で、それが極楽だと、私はこういうようにいうわけなんです。

(未完)